

2013年度氷河情報センター分科会報告

雪氷研究大会(2013・北見)において、ミニシンポジウムおよび総会を開催した。ミニシンポジウムでは、ブータン・ヒマラヤの研究紹介およびアジア高山地域におけるデータベースプロジェクトの概要に関して、2件の講演と質疑応答を行った。引き続き総会では、活動・会計の報告、活動方針・予算の承認および役員改選を行った。

日時:9月17日(月) 15:00 - 17:00(総会16:30 - 17:00)

場所:北見工業大学(C121会場)

ミニシンポジウム:

1. ブータン・ヒマラヤの地形と気候が氷河分布に与える影響

永井裕人氏(名古屋大学大学院環境学研究科)より、現在取り組んでいるブータン・ヒマラヤ氷河研究について紹介して頂いた。ヒマラヤの氷河は変動が不均一であり、詳細な氷河台帳の整備・更新が遅れているためにその包括的・定量的な評価が進んでいない。そこで、永井氏はブータン・ヒマラヤにおいて氷河台帳の作成を行い、氷河の空間分布に気候と地形がどのように関係しているかを目的に研究を行っている。具体的にはALOS衛星PRISMセンサなどを用いて、ブータン・ヒマラヤに存在する氷河1500個余りを目視判読で手動抽出して詳細な氷河台帳を作成した後に降水量と地形の空間分布との関係を調べた。その詳細な結果について報告があった。

2. アジア高山地域における山岳氷河の面積高度分布データベースプロジェクト

縫村崇行氏(名古屋大学環境学研究科)は、名古屋大学で坂井亜規子氏(名古屋大学環境学研究科)を中心に取り組んでいるGlacier Area Mapping for Discharge in Asian Mountains(高精度氷河台帳プロジェクト)、通称GAMDAMプロジェクトについて紹介した。広域の氷河変動量をモデルで見積もるために、高精度な面積高度分布情報を含んだアジア高山域の氷河データベースの構築が不可欠である。既存の氷河データベースには、氷河の中心座標データのみで輪郭が無い、地域毎に担当期間が異なり精度にばらつきがあるなど、様々な問題点がある。GAMDAMプロジェクトでは氷河マッピングを全て手動で行い、高精度の標高情報を含んだ氷河台帳の作成を目指している。現在、氷河の初期抽出を終えた段階で、今後は品質確認や修正を行う予定である。

限られた時間のセッションではあったが、活発な質疑応答があった。ブータン・ヒマラヤの氷河研究の紹介およびアジア高山地域におけるデータベースプロジェクトについて、まとまった話を聞く機会を提供でき、有意義なセッションとすることができた。今後も氷河情報センターが情報交換の場として活用されることが期待できる。

総会：

1．2012-13年度活動報告

- 1) 氷河情報センターニュースNo. 34の編集・発行（「雪氷」75巻3号）
- 2) 氷河情報センターHPの更新
- 3) 分科会セッション（本シンポジウム）の企画・開催
- 4) 2013年度総会（本総会）の開催

2．2012年度会計報告

3．2013-14年度活動方針

- 1) 2014年度総会の開催
- 2) 氷河情報センターニュースの編集・発行
- 3) ミニシンポジウム（オーガナイズドセッション）の企画・開催
- 4) 氷河情報センターHPの更新

4．2013年度予算案の承認

5．役員改選：センター長，財務幹事，広報幹事1名

6．その他

- 1) センターの活動支援基金
- 2) 新旧センター長挨拶

文責：對馬あかね（北海道大学大学院環境科学院）
永塚尚子（国立極地研究所）